

1 第4学年における 学級経営の ポイント

はじめに ……1
 本書活用のポイント ……2

学級経営を充実させるために ……8
 4年生の担任になったら ……10
 4年生と言葉かけ ……12
 4年生の子どもとの学級システムづくり ……14
 学級経営計画 ……16

2 第4学年の 学級経営

4月 出合いをよりよいものにするために「聴く」 ……20
 教室準備 ……22
 教室掲示① ……24
 始業式・学級開き ……26
 学級目標の話し合い ……28
 朝の会 ……30
 帰りの会 ……32
 係活動① ……34
 給食指導 ……36
 掃除指導① ……38
 身体測定 ……40
 宿題指導① ……42
 ICT開き ……44
 授業参観① ……46
 学級懇談会① ……48
 家庭訪問 ……50

5月 子どもたち同士がつながる ……52
 教室掲示② ……54
 学級活動① ……56
 席替え ……58
 クラブ活動 ……60
 避難訓練①（火事） ……62
 遠足 ……64

6月 「うまくいかない」を楽しむ心を育てる ……66
 教室掲示③ ……68
 登下校の指導 ……70
 雨の日の過ごし方 ……72
 人権学習① ……74
 宿題指導② ……76
 授業参観② ……78
 学級懇談会② ……80
 保護者との関わり① ……82

7月 1学期を振り返り、2学期につなげる ……84
 教室掲示④ ……86
 水泳指導 ……88
 自主学习① ……90
 学期末学級会① ……92
 掃除指導②（大掃除） ……94
 終業式 ……96

8月 客観的に学級を捉え、2学期に備える ……98
 自己研鑽 ……100
 休暇 ……102
 授業準備 ……104
 始業式準備 ……106

9月 仕切り直し、築き直す ……108
 教室掲示⑤ ……110
 始業式 ……112
 係活動② ……114
 避難訓練②（不審者対応） ……116
 宿題指導③ ……118
 ICT活用振り返り ……120
 運動会① ……122
 運動会② ……124

10月 行事と日常で成長を価値付ける ……126
 教室掲示⑥ ……128
 学級活動② ……130
 社会見学 ……132
 授業参観③ ……134
 学級懇談会③ ……136

保護者との関わり② ……138

11月 関係を広げ、対話力を高める ……140

教室掲示⑦ ……142

人権学習② ……144

芸術鑑賞 ……146

学習発表会 ……148

マラソン大会 ……150

12月 試行錯誤していける集団をめざす ……152

教室掲示⑧ ……154

人権学習③ ……156

自主学习② ……158

学期末学級会② ……160

終業式 ……162

1月 仕切り直し、次学年に意識を向け始める ……164

教室掲示⑨ ……166

始業式 ……168

係活動③ ……170

避難訓練③（地震） ……172

児童会 ……174

2月 関係を広げ、教師の「出」を減らす ……176

教室掲示⑩ ……178

避難訓練④（風水害） ……180

授業参観④ ……182

学級懇談会④ ……184

3月 1年間の成長を実感し、次学年に向かっていく ……186

教室掲示⑪ ……188

6年生を送る会 ……190

卒業式 ……192

保護者との関わり③ ……194

学期末学級会③ ……196

学級じまい・修了式 ……198

執筆者一覧 ……200

学級経営を 充実させるために

1 学級経営の充実とは

まずは、タイトルにもある「学級経営の充実」に注目してみましょう。読者のみなさんは、どのようなことを「学級経営の充実」と捉えますか？

例えば、「学級経営の充実とは？」と問いを立てると、

- ・子どもたち一人一人が成長する
- ・子どもたち一人一人が毎日楽しく過ごせる
- ・学級が子どもたち一人一人にとって安心した場所になる
- ・子どもたちが協働して物事に取り組めるようになる
- ・子どもたちが自治的集団となる
- ・教師の願いと子どもたちの願いが重なる
- ・教師自身も毎日を充実して過ごすことができる

…など、様々な考えが生まれるのではないのでしょうか。どれも大切なことばかりです。簡単に「学級経営の充実とは〇〇だ」とは言えません。教師が子どもたちの成長を願い、子どもたちが毎日過ごす学級をよりよいものにするために試行錯誤する過程で、少しずつ学級経営が充実するでしょう。

2 「学級経営で大事にしたいこと」をもつ

むやみやたらに「学級経営を充実させよう」と思ってもうまくはいきません。誰かの魅力的な実践を知っては、「あれもしたい」「これもしたい」となってしまう。自分の中で「学級経営で大事にしたいこと」という芯がなければ道に迷ってしまうでしょう。

本書の執筆者に「学級経営で大事にしている（したい）こと」をたずねると、

- ・試行錯誤し、よりよいを更新する。一人一人が生きる。(坂本)
- ・民主と平和。そのベースとなる人権感覚を養うこと。(永井)
- ・主役は子ども。自分と友達を大切に。(佐野)
- ・「自分は案外やれるなあ」を実感する機会の確保と積み重ね。一人一人が認め合える集団。(小倉)
- ・安全に過ごす、楽しく過ごす。お互いを知る、思いやる。自分たちで話し合う機会も多く。(樋口)

・自律性と協働性を育てる。一人一人のよさが大切にされる。自分（たち）でよりよい世界をつくる。(若松)

と、答えていました。みなさんそれぞれ自分の言葉で「これを大事にしたい」というものを表現しているのが素敵です。決して、「〇〇さんの考えはよくない」「△△さんの考えは正解」なんてことはありません。それぞれの「大事にしたいこと」には重なりも見られます。

こうしたシンプルなことを言語化しようとする、結構悩むものです。言語化する過程で、

- ・自分の大事にしたいことは何か
- ・子どもたちの成長をどのように支えるか
- ・よい学級とはどのようなものか
- ・1年後、どんな学級になってほしいか
- ・教師の役割とは何か

…といった「問い」が生まれるでしょう。これら一つ一つの「問い」と向き合うことで、「大事にしたいこと」がさらに深掘りされます。何度も考え続けることを大事にしましょう。

3 学級担任1人で何とかしようとしな

学級経営を充実させるのは、担任だけではありません。「教師1人」にできることには限りがあります。学校中の先生、子どもたち、保護者などといっしょになって学級経営を充実させる意識をもちましょう。「いっしょに」という意識を忘れずにいると、気持ちがふっと楽になるはずです。「学級経営が充実する」とは、「教師1人が頑張りすぎない学級になっていく」ということでもあります。子どもたちと教師が過ごす「学級」という場所を、そこにかかわり合う人たち同士がともによりよい場所にしていけるようにしたいものです。

その中で、改めて「教師がすべきこと」「私ができること」に目を向けられるようにします。教師である私だからこそできることがあるはずです。

「子どもたちが育つために教師（私）ができることは何だろう？」

「よりよい学級づくりに向けた教師（私）の役割とは何だろう？」

といった「問い」を大切にしながら、よりよい指導や支援等を追究し続けるようにします。

こうした「問い」に答えなんてありません。日々子どもたちとともに過ごす中で「〇〇すればいいかも」「△△が大事だなあ」…と、少しずつ確からしいものを見つけられるでしょう。そんな自分を大事にすれば、子どもたちから教えられたり学ばされたりすることが増えます。

決して「充実させないといけない」「自分の学級経営はよくないのでは…」と焦る必要なんてありません。それよりも「できること」「できるようになったこと」を少しずつ積み重ねていきましょう。子どもたちとともに一步一步じっくりと進む中で「充実」が生まれます。本書が、そんな先生を支えるものになればいいなと思います。

4年生の担任になったら

1 子どもたちを注意深く見守ろう

9歳以降を小学校高学年の時期と捉えます。幼児期の特徴を残しながら成長する低学年の学童期を終え、物事がある程度客観的に認識するようになります。そのため、好きなことをとことん追求したり、自分の得手不得手を理解しながら他者と協働的に学んだりすることもできるようになります。

4年生は好奇心旺盛で、パワーを前向きに発揮できれば、大きく成長する姿を見ることができるのです。

一方で、「9歳の壁（10歳の壁）」や「ギャングエイジ」と言われるのもこの学年の特徴です。探究的かつ創造的に学んでいこうとすればするほど、これまでの学習の基盤が重要になってきます。自己肯定感をもって意欲的に学んできた子どもがさらに飛躍する一方で、自分に自信がもてず他者と比較して、劣等感を抱く子どもが生まれてしまうのが「9歳の壁」の特徴です。また、保護者や教師の管理下から離れて行動し、社会性や協調性を身に付けていくことは大変重要な経験ですが、必ずしもプラスに働くとは限りません。

このような時期の子どもたちと過ごす4年生の担任は、刻一刻と変わる子どもたちの言動を注意深く見守ることが大切です。問題が表面化していなくても、前兆がどこかに表れていることが少なくありません。様々な出来事に対して敏感に感じる4年生の子どもたちを受け入れつつも、ほどよい距離感で適切に子どもたちを導いていけるように、見通しをもち、落ち着いて子どもたちに接するようにしましょう。

2 一人一人に寄り添う

先に述べたように、4年生の1年間は、とても飛躍的な成長が期待できます。そのカギになるのが、自己肯定感です。

自己肯定感とは、自己の在り方を積極的に評価できる感情、自分自身の価値や存在意義を肯定できる感情などを意味する言葉です。

ここで大切にしたい考えは、自分の能力が高いと誇れることが自己肯定感につながるのではなく、

自分がそこに存在してもよいと思えること、自分にはそれほど得意なことではなくても、大事にされていると感じることではないでしょうか。

子どもの自己肯定感を高めていくためには、子どもたちが学校に来たくなること、学級に安心していられることが非常に大事な要素となります。担任は、一人で多くの子どもたちを見なければいけません。子ども一人一人に寄り添う気持ちを忘れずにいたいものです。

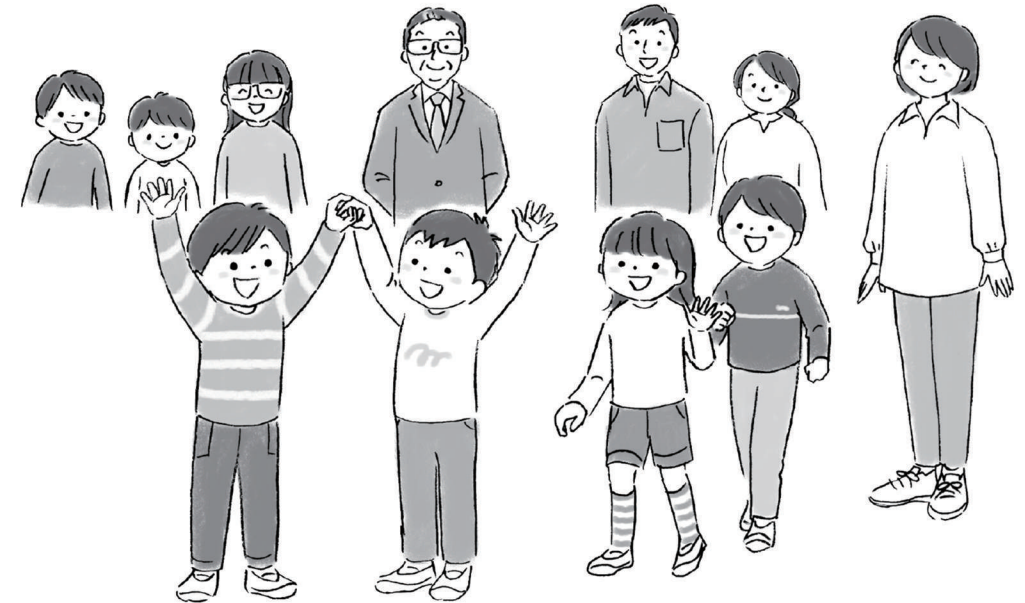
3 つながりをつくる —自分・友達・学級・学年・学校—

自分自身を客観的に捉えられるようになった子どもたちに、視野を広げる視点を与えることで、常に成長を実感しながら安心して前進できるようにします。

そこで、自分自身を見つめる取り組み、同じクラスの子どもたちとつなぐ取り組み、学年をつなぐ取り組み、学校と子どもたちをつなぐ取り組みを、年間を通して考えます。

決して、「独り」「独クラス」にならないよう、協働的に学ぶことを大切にしながらつながりを広げていきましょう。

おすすめは、「個人目標の設定」「1年間のスケジュール確認とクラスの在り方を子どもと相談」「学年イベントの開催」「低学年に読み聞かせ」「社会見学での学びを学校掲示板で発信」などがあります。年間を通して実施することで、一つ一つの経験が積み重なり、周りの人に感謝する気持ちをもったり、成長する自分や仲間気付いたりできるでしょう。



始業式・ 学級開き

ねらい

期待と不安を抱えた子どもたちが安心と一層の期待をもてる出会いの場をつくることで、気持ちのよい1年間のスタートを切る。


指導のポイント

環境の変化に不安と期待をもって登校する子が多くいます。進級や学級（担任や友達）への安心や期待をもてるよう関わり、「今年1年を楽しく過ごすことができそう！」という思いをもてる場となるような関わりを目指します。そのために、担任の自己紹介だけでなく、思いを伝える場や一人一人の見取りが大切です。「笑顔で帰す」を目標に、1年間のスタートを切りましょう。

4年生スタート!


昨年はみなさんの「今年がんばろう!」という気持ちがよく伝わりました。
たくさん**チャレンジ**して、**一人一人**が力を付ける
楽しくて最高の1年にしましょう。(私はそれを全力で手伝います。)

みんなと会って
ステキな1年
になったよ!



4年生の行事

5/19	クラブ	7/14	現地学習	2/9	○○○○○フェスティバル
5/28	○○会	10/15	○○発表会	3/25	修了式
6/25	遠足	11/12	現地学習		



活動の留意点

01 新年度への安心と期待を

「4年生、うまくやれるかな」「新しい先生はどんな先生かな」「去年はこうだったけど…」子どもたちは様々な気持ちで始業式を迎えます。まずは「安心」をもたらす出会いをしましょう。担任の自己紹介はもちろん、子どもたちへの期待を伝えると安心感が生まれます。始業式の様子や前担任からの見取り、昨年の様子から今年1年の期待を担任から伝えるとよいでしょう。

4年生の具体的な活動を知ることにより一層「今年は楽しくなるかも」と期待値を高めることができます。まずは子どもたちに「今年楽しみなことはある?」と聞いてみるのがよいでしょう。よく挙がるものは、

- クラブ活動
- 高学年の仲間入り

●現地学習
などです。

子どもたちから出たものを生かして、「どのようなクラブがありそう?」などとよりイメージを膨らませたり、その他の活動を取り上げたりすることで一人一人が楽しみを見いだせるようになります。

また、低学年・高学年と分けた際には高学年の仲間入りとなります。「低学年のお手本」ということを意識し、今まで積み上げてきたものを発揮できるよう伝えていくことで、下級生や全校を意識するようになり、5年生にもつながっていきます。

02 一人一人を丁寧に見取り、 笑顔で帰す

期待や不安など様々な気持ちを抱えて登校してきた子どもたちの姿があります。新年度への期待が大きい子がいる一方で「前の担任の先生や仲の良い友達と離れてしまった」「昨年はうまくいかなかったけど、今年はどうかな」といった気持ちを抱えている子もいます。そのため、クラス全体の雰囲気だけでなく、一人一人の様子を見取ることも大切です。初日だけでは難しい部分もありますが、継続的に見取りを行い、関わっていくことで、一人一人が生き生きとした学校生活を送ることにつながっていきます。

一人一人の様子を見取り、下校までに声をかけたり、楽しめる活動を用意したりして、笑顔で「先生さようなら」と下校すれば大成功です。下校時には玄関まで見送り、一人一人の顔を見て、一言声をかけましょう。

保護者の方も、新年度の子どもの様子をとても心配しています。4年生頃から家庭で学校の様子を話さなくなる子も増えてくるようです。下校前に「お家の方に今年の楽しみ伝えてね」と会話を促す関わりをしてよいでしょう。帰宅後「今年も楽しそう!」と子どもの生き生きした姿を見れば、保護者の方も安心して、今後の教育活動にも協力的になってくれます。

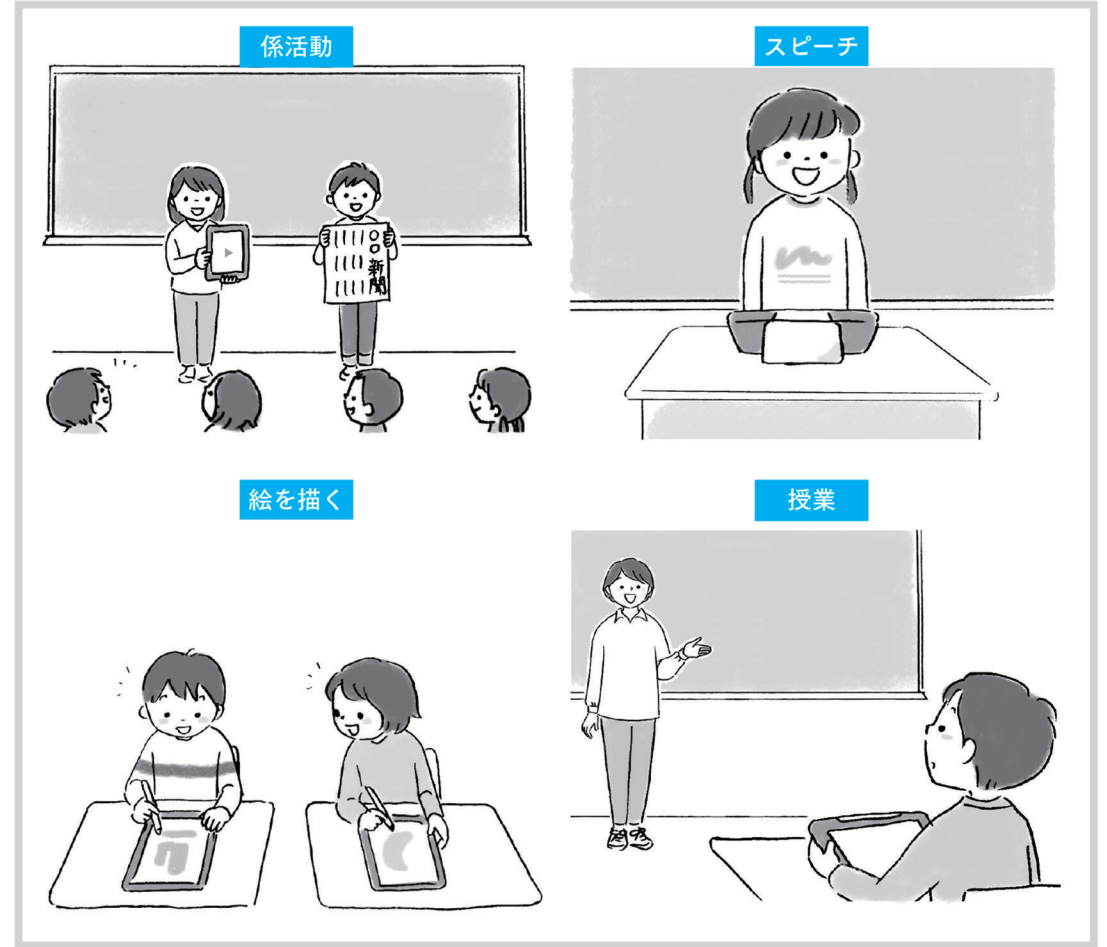
ICT 開き

ねらい

子どもたちが、「これまでのICT機器活用」「これからのICT機器活用」について目を向けられるようにすることで、自分たちが大事にしたいことや取り組みたいことを見つけられるようにする。

指導のポイント

3年生時、各学級でICT活用の内容やレベル、ルールなどに違いがあったかもしれません。そこで、互いの「これまでのICT活用」が重なるようにします。その上で、「これからのICT活用」についていっしょに考えます。学習や生活のあらゆる場面で活用するからこそ、自分たちでしっかりと「活用の仕方」を意識できるようにします。



活動の展開

01 「これまでのICT活用」を近くの人と共有する

昨年度、どのようにICT機器を活用していたかを尋ねます。子どもたちが実際にICT機器を活用しながら、近くの人（昨年度違う学級の人同士）と「これまでのICT活用」を聞き合えるようにします。



02 ICT機器を活用するときに大事にしている(すべき)ことを共有する

01で子どもたちがICT機器を活用する様子を見て、「素敵だな」と感じたことを伝えます。その上で、「ICT機器を活用するときに大事にしている(すべき)こと」を全体で聞き合います。

【例】

使い方

- ・落とさないように大事に使う
- ・置く場所を工夫する
- ・雑にするのではなく、丁寧に操作する

活用法

- ・自分の画面ばかりを見ずに相手と考えを聞き合う
- ・ICTならではのよさを大事にする

03 「これまでのICT活用」を全体で共有する

01で聞き合ったことを基にして、全体で「これまでのICT活用」を聞き合います。それぞれの学級での取組のよさや一人一人が頑張ってきたこと、成長したことなどを大事にできるようにします。

- ・話すのと同じくらいのタイピング速度
- ・プレゼンテーションをするのが得意
- ・ニュースを動画にまとめて伝えられる
- ・知りたいことをすぐに調べられる

…とそれぞれのよさが重なり合うようにすることで、子どもたちは自然と学ぶでしょう。

04 「これからのICT活用」を全体で共有する

「これからどのようにICT機器を使いたい？」
「どんなことに使ったらおもしろそうかな？」
「どんなことができるようになりたい？」

…と問いかけながら、「これからのICT活用」に目を向けられるようにします。子どもたちなりに「〇〇してみたい」「△△しよう」と考えることで、どんどん自分たちで工夫して活用するようになるでしょう。02で考えた「大事にすべきこと」も含めて、子どもたちといっしょに進めるようにしましょう。

6

「うまくいかない」を 月楽しむ心を育てる

▶ 6月に意識すること

- ・学級の心理的安全性を確かなものにする
- ・「うまくいかない」を大切にできるようにする
- ・子どもたちのふり返り力の成長を支える

6月の学級経営を充実させるために

● 子どもたち同士がさらに「自分」を出せる場をつくろう

4月に比べて、子どもたち同士のつながりが生まれてきたでしょう。4月当初に見られた緊張感もかなり薄れているはずです。ここで、「お互いの心理的安全性が保たれているか」を基に学級の様子を捉えるようにします。

「安心して自分の意見を言えない」「衝突することを恐れている」となっていれば、それらを解決する指導や支援を考えましょう。心理的安全性が保たれているからこそ、子どもたちはより「自分」を出せるようになります。一人一人の「違い」が表れる学級にしたいものです。

● 「うまくいかない」を楽しめる心を育てよう

自分（たち）で様々なことにチャレンジすると、「うまくいった」だけでなく、「うまくいかなかった」ことも出てくるでしょう。とても大切な経験です。だからこそ、子どもたちが「ああ、自分たちで考えて行動するんじゃなかった」「やっぱり先生に任せておいた方が楽だ」と思わないようにしたいものです。

うまくいかなかったときこそ、「うまくいかなかった中でもこの部分はうまくいったな」「次はこうしてみよう」と新たに考えることを楽しめるようにします。教師が子どもたちの試行錯誤を楽しく受けとめていると、子どもたちも楽しめるようになるでしょう。

注意事項

4月当初の緊張感も薄まり、子どもたち同士の関係性ができてくると衝突が増えるようになります。お互いにかかわり合ったり、「自分」を出そうとしたりしているからこそ生まれるものです。解決の仕方を学べるようにして、さらに濃いつながりが生まれるように支えましょう。

ケンカへの対応

▶ ねらい

お互いに「自分」を出せるようになってくると衝突やケンカが増えるようになります。衝突やケンカをきっかけに、お互いの関係がより深まるようにしたいものです。最初は教師がケンカを仲裁しますが、徐々に子どもたち同士で解決できるようにします。

内容

すぐに「ケンカしてはだめでしょう」「〇〇してはだめでしょう」と指導しようとはしません。「何が起きたか」「何があったのか」といった事実を丁寧に把握してから、子どもたちといっしょに解決できるようにします。

- ①ケンカを止める
- ②興奮している場合は、落ち着きを取り戻せるようにする
- ③「どうしたの?」と問いかけて、「何があったか」を話せるようにする（1人ずつ自分の言葉で）
→起きた順序でいっしょにふり返れるようにする。相手のことばかりではなく、自分のことを話せるようにする
- ④③を基に、ケンカが起こるまでの経緯やケンカそのものの内容等をいっしょに確認する
- ⑤「どうすればケンカにならなかったかな?」と問いかけて、改めて今回起きたことをふり返れるようにする
→相手のことばかりではなく、「自分がこうすればよかった」を見つけられるようにする
- ⑥「ここからどうしたい?」と問いかけて、解決に向けて必要なことを考えられるようにする
→単に「ごめんね」「いいよ」で終わらせない。本当にお互いにとってのよりよい解決を見つめられるようにする。今後の過ごし方やこれから意識したいことを考えることも含める
- ⑦子どもたちの今後を丁寧に見取る。⑥で考えたことを行動に移していれば、そのよさをきちんとフィードバックする

ポイント

- ・子どもたち自身がそのときに起きたことや感情を見つめ直すことができるようにしましょう。
- ・「相手のせい」にしたがる子もいます。それよりも「自分」に目を向けられるようにします。
- ・この時間だけで「解決」とはなりません。その後を丁寧に見守るようにしましょう。

保護者との 関わり①

ねらい

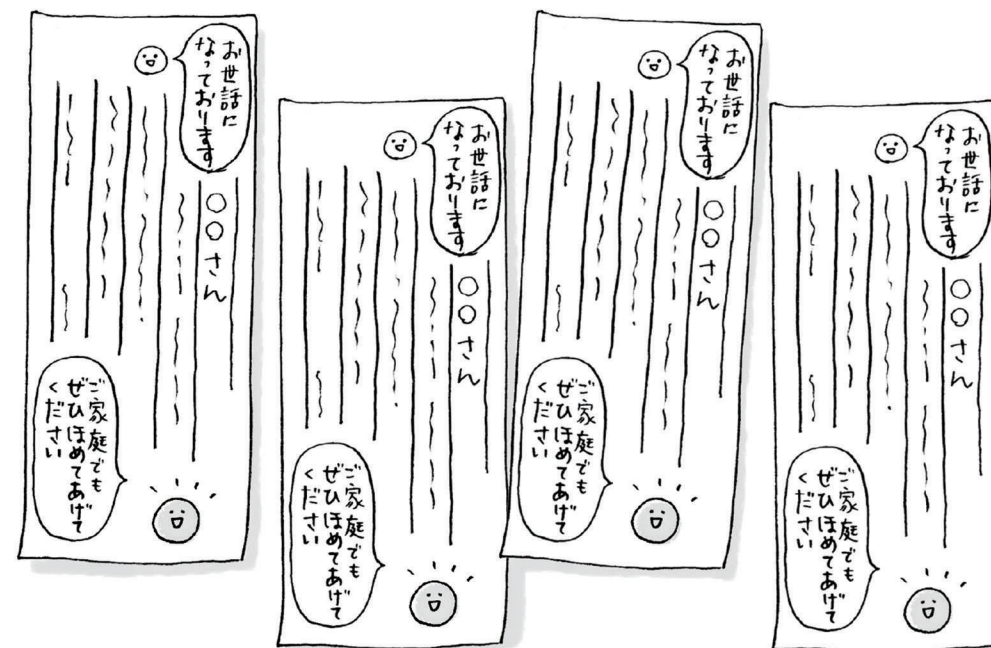
保護者とつながるチャンネルをもっておくことは大切である。ここでは一筆箋や電話を使って、学校での様子を伝えて、保護者・教師・子どもの関係を強化できるようにする。

ポイント

4年生になると、子どもは学校での過ごし方を保護者に伝えることが減ってきます。でも、学校での様子を気にしている保護者は多いはず。そこで、一筆箋と電話という2つのチャンネルを用いて、教師から見て頑張っていると感じたことや友達との素敵な関わりなどを伝えるようにします。特に休み時間の過ごし方や友達関係を気にする方は多いので、これらを中心に伝えるとよいでしょう。家庭での会話のきっかけにもなります。



個別にがんばりを伝えられる一筆箋



個別にもらえてうれしい気持ちになる分、全員に同じ数渡せるよう留意する。

活動の展開

01

一筆箋を書いて渡す

子どもと関わる中で見取った内容や気付きを個人カルテとしてメモすることを「家庭訪問」のページでも述べました。その個人カルテの中から「これは保護者とも共有したい」という内容を見つけて一筆箋に書きます。一筆箋については、「普段の様子をお家の人に伝えたいので、先生が気付いたことをこの紙（一筆箋）に書いて渡します。心を込めて書くので大切に届けてくださいね」と子どもに説明します。また、「一気に全員分を書くことは難しいので、日を分けて少しずつ書きます。必ず全員分を書くので安心してください」とも補説します。渡す際は休み時間などに一人一人に一言添えて直接届けるようにします。

【文例】

「休み時間に〇〇さんとオルガンを弾いて楽しそうに過ごす姿が印象的でした。友達との関わりが増えています。」

「休み時間にクラスのみみんなに声をかけてドッジボールをしていました。家庭訪問でお伝えしたリーダー性が発揮されています。」

「朝の会の日直のスピーチで、昨日あった出来事を順序立てて話すことができていました。」

「当番の仕事として、学級文庫の整理をしていました。おかげで本が手に取りやすくなりました。」

02

電話で伝える

一筆箋で書き切れない内容やとても印象的だった内容は、電話で伝えることをおすすめします。その場で保護者の反応を聞くことができる上に、最近の家の様子についても話を聞くことができます。「〇〇さん、最近～を頑張っていて、とても感心します。どうしてもお伝えしたくて電話しました」と簡潔に伝えるとよいでしょう。ただし、忙しくて電話に出られない保護者や、学校からの電話は何かよくないことがあったのではないかと心配に思う保護者がいるということを知っておくことも大切です。事前に学級通信などで、「電話でお子さんの様子をお伝えすることもあります」など知らせておくともよいでしょう。

03

定期的に行う

一筆箋と電話は、学級通信とは異なり、個別に頑張りや成長を伝えることができます。頻繁にすることは難しいですが、定期的を実施して保護者と子どもについて共有することは大切です。自分でどれくらいのペースで発信するか（できるか）を考えて無理なく続けられるようにしましょう。

誰に一筆箋を書いて、誰に書いていないのかを把握するために、名簿などに記録しておくことも大切です。子どもたちは一筆箋をもらうことがうれしいので、友達と「もらった」「もらっていない」という話をします。できるだけ、全員に同じ数が渡せるようにしましょう。

人権学習②

ねらい

「人権」という言葉に出会い、一人一人の違いに気付いたり、一人一人を大切にしたりする気持ちを育む。

指導のポイント

「人権」という言葉を提示しても、4年生には理解が難しいことが多いです。「人権」とは、「一人一人が生まれながらにもっている、幸せに生きる権利」であることを説明します。子どもたちの理解は、この段階ではほんやりとしていても構いません。高学年になると、社会科や道徳などでくり返し考える機会に出会います。担任する子どもの様子や状態に合わせて、どのような学習内容にするかを検討してほしいと思います。

11月だからこそ人権を考える

11月は「人権」について考える期間に適していると思います。

①11月20日は「世界こどもの日」

1959年のこの日、国連総会で「子どもの権利宣言」が、30年後の同日、「子どもの権利条約」が採択されました。子どもたち自身が、権利について知り、考える機会になります。

②人権についての取組を行う自治体が多い

全国各地で、人権月間や人権週間として、性差別、虐待、誹謗中傷、いじめなどについて考え、防止する取組が行われています。

この機会に、4年生には一人一人の違いだけでなく、世界の子どもたちにも視野を広げるチャンスをつくりたいところです。同じ年頃の子どもたちの生活や様子を見て、自分自身の生活を見直したり、考え方が広がったりすることにつながります。



活動の展開

01 実態に合わせて教材を選ぶ

学習テーマは「子どもの人権」とします。このとき、学習に使用する教材はどのようなものがよいかを考えます。

①絵本や紙芝居

「絵本ナビ」というサイトや学校図書館で探してみましょう。

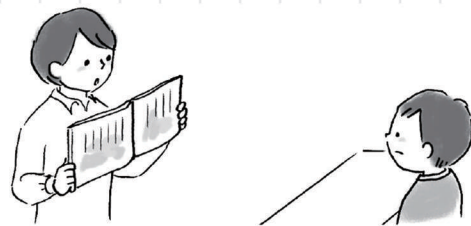
②動画

NHK for Schoolで「人権」「こども」と検索するとたくさん動画が見つかります。また、UNICEFやNGOのサイトでも動画が掲載されています。

③資料(写真、新聞記事など)

この時期になると、小学生向けの新聞にも、人権について考える記事が掲載されます。

02 「知る」ことから始める



教師が1冊の絵本を読み聞かせします(『ランドセルは海を越えて』内堀タケシ 写真・文(ポプラ社)など)。子どもたちに「今、素敵だと思ったことを、友達と話してみましよう」と言います。驚いたり、不思議に思ったり、納得したりする様子が見られます。

03 自分の今と比べてみる



自分に似たところや異なるところなど、見つけたことを周りの友達と意見交流します。子どもたちの中には、相手を尊重する意見や思いやりのある言葉を選んで表現している子もいるので、紹介していきます。

04 自分ごととして考える



「自分は周りの人とどのように過ごしていきたいですか。そのために、どんな行動をしてみたいですか」と尋ね、色々な考えを出し合います。この考えの違いもまた、一人一人のよさなのだと認めていきたいところです。

避難訓練③ (地震)

ねらい

校内で地震が発生したときを想定した避難訓練を行うことで、地震に対する理解を深め、身の安全を守る方法を実践しようとする。

指導のポイント

地震が、他の災害や不審者の侵入と違う点は、自分の体で何が起きているかを感じられることと、危険が瞬時にやってくるということです。

つまり、非常事態を認識してすぐに行動できる判断力を養うとともに、命を守る行動の選択肢をもっておくことが重要になります。

事前指導

地震大国といわれる日本では、防災教育が大変重要な教育になっています。いつ、どこで起きてもおかしくない状況であることを子どもたちと確かめ、様々な場面で地震が起きた場合の行動を想定して試みるのが大切です。

例えば、理科や家庭科で火やガスを使っている場合。登校途中で建物の近くにいる場合。休み時間でトイレの個室にいる場合。このような場面を想像すると、揺れが起きているときの危険を防ぐ方法と、揺れがおさまってから取る行動を具体的に考えることができます。火やガスはすぐに使用をやめること、ガラスなどが割れる可能性から建物からはすぐに離れること、トイレの個室の扉が歪んで出られなくなる可能性から、すぐに扉を開けることなどを知っておくと、いざというときに判断できます。子どもたちが自分で命を守る行動を取れるように、事前指導を丁寧に行いましょう。

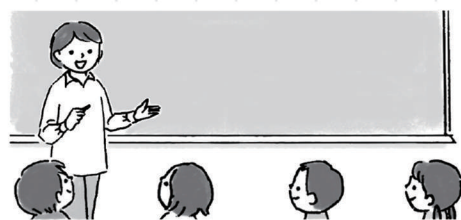
様々な場面での避難を想定する



活動の展開

01

通常通りに授業を始める



子どもたちには、その日のどこかで避難訓練があることを伝えておきましょう。子どもが自分で行動できるようにするための訓練です。訓練だから特別なことをするのではなく、訓練だからこそ通常通りに授業を始めましょう。

02

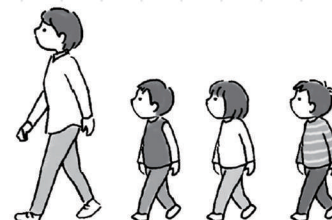
訓練開始時



放送が入るとすぐに机の下に入り、机の脚を掴んで頭を守るようにします。教師は、子どもたちが全員頭を守れているかを確認し、揺れがおさまるまで動かないように伝えます。揺れがおさまっても第二波が来る可能性から常に頭を守るようにします。

03

避難中



防災頭巾を被ったり、教科書などで頭を守りながら、廊下に整列し、他のクラスと連携して避難します。このときにも、想像力を働かせ、通路に危ないものはないか、壁は崩れていないか、第二波が来たときはどうするか、考えながら速やかに移動します。緊張感をもって行動しましょう。

04

事後指導



事後指導では、自分の行動について振り返りを行います。また、阪神淡路大震災や東日本大震災の資料を見せ、地震が起きた際の避難方法や被害の可能性について考えを広げる機会にします。映像資料を見せる場合には、強い刺激を与えてしまうこともあるため、事前にどんな映像が流れるかや、見ない選択肢もあることを伝えておきましょう。